

荒俣宏

百鬼夜行篇

帝都物語 五郎 7

KADOKAWA NOVELS

60年安保騒乱の最中、世界征覇を狙う謎の
超能力者VS祖国防衛隊・妖美なる鬼女
の対決! 書下しサイキックノベル



ガダワ ハルズ

昭和六十一年十月二十五日初版発行
昭和六十二年十一月二十五日三版発行

著者 荒俣宏
あらまたひろし

発行者 角川春樹

ていもの がたり
帝都物語 7 ひやつきやぎようへん
百鬼夜行篇

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見三三 振替東京三一五三〇六
千二三電話 営業〇三三六八五二 編集〇三三六八五二









KADOKAWA NOVELS

帝都物語 7

ひやうきやま
百鬼夜行篇

荒俣 宏

絵・口絵・本文イラスト／丸尾末広

目次

序

鴉からすめの眼球だま

13

卷一

巷ちまたをさまよう人々

29

卷二 闘争の夏へ

75

卷三

怨霊おんりようの解剖学かいぼうがく

117

卷四 時のはざまへ

154

卷五

百鬼ひゃつき、夜行やぎようす

220

昭和二十年八月十五日。敗戦を機に東京の大地は時間の断層を生じ、明治政府が密かに完成させた怨霊封じの霊的ネットワークも寸断された。上野、靖国、千代田界隈では魔物を封じる西郷や大村像が大きく揺らぎ、その隙をついて数多の妖怪が焼け跡に這い出した。

一方、屍解という秘術を通じて若い肉体を取り戻した加藤保憲は、一時鎮静していた東京壊滅の野望をふたたび燃えあがらせ、長らく人質同然にしてきた辰宮（目方）恵子を解放した。恵子は由佳理や雪子の身を案じ、敗戦国日本へ帰るが、その際加藤から「長生を招く神秘的な鶴笛」を贈られた。恵子はその説明を信用し、東京へ戻りついで由佳理に鶴笛を手わたした。

進駐軍に占領された東京には、すでに往時の帝都の面影はない。雪子は色街に身を沈め、それでも母由佳理を看病しつつける。恵子は正式な夫辰宮洋一郎の死に伴い旧姓の目方に戻ったが、心はいつも二人の遺族に注がれた。また魔物が出没する上野の山で、怨霊を抱き鎮める魔力を持つという桜の木に灰を撒いて歩いている奇妙な紳士角川源義に出会った。由佳理に鶴笛を吹かせ健康を取り戻させようと努力しつつも一向に効果のあ

がらない中、苛立っていた恵子は源義に心なごむ時間を与えられる。

やがて東京に上陸した加藤保憲の危険な行動が開始される。加藤は東京崩壊の切り札である大怨霊平将門を目覚めさせ、将門がその死骨に刻みつけた怨念を地上に再解放することで破壊を完璧なものにしようと考えていた。そこで彼が目をつけたのは、A級戦犯に指定され死を覚悟したファシスト大川周明だった。大川は独房に加藤を迎え、刑死した直後東京の地下深くへ潜入し将門の怨霊と対決しようと約束した。だが、この陰謀を知った将門の妖魔たちが大川を襲い、精神錯乱におとしこんでしまった。

昭和二十三年のクリスマスが来た。雪子は新しく知り合いになった大蔵省の役人平岡公威（三島由紀夫）を、また恵子は宿敵加藤保憲をパートナーに、ダンスを開始した。その華やいた祝宴からは遠く離れて、辰宮由佳理は最後の生命力をふりしぼって鶴笛を吹き、天上へ召される。加藤が手渡した霊の鶴は、実は兄洋一郎の骨から作られた「死に至る楽器」なのだ。

〈主な登場人物〉

加藤保憲 帝都完全崩壊を策した怪人。第二次大

戦の後、自衛隊に入り、調査学校の教官となり再び帝都崩壊を企む。式神をあやつるほか、平岡公威に近づき、学生運動（全学連等）と対決し、その動乱を帝都崩壊の足がかりにしようとする。

辰宮雪子 辰宮由佳理の娘。母亡きあとは目方恵子を母と呼んでいて平岡公威と深く係る。靈視力を有し、帝都を徘徊する怨霊たちを目撃する。

目方恵子 東北にある倅神社の娘。故洋一郎の嫁であったが、加藤によって中国に連れ去られるも再び日本に戻る。平将門の霊を守護するためドルジエフと対決する。

平岡公威 小説家、三島由紀夫。辰宮雪子の助けをかりて、自分にとりついた怨霊を取り払うが、そ

の際見た靈視に興味を持つ。後に自衛隊に体験入隊し、加藤保憲と再会し、加藤の下、祖国防衛隊隊長となり全学連等と対峙する。

中島莞爾 辰宮雪子の昔の恋人で二・二六事件に係った青年将校。事件の後処刑されるが怨霊として平岡公威にとりつく。

紅蜘蛛 新宿の酒場で女装し、平岡公威、辰宮雪子と親しくする、自称、三島を邪霊から護る半陰陽の守護天使。本名、年齢不詳。

石橋湛山 鳩山首相の後、首相になるが加藤の陰謀により毒をもられ健康を害してまもなく退陣。

市岡（兄） 東大生。目方恵子の隣りの部屋に住み、学生運動に参加する。後に出版会社に勤め角川源義などとも面識をもつ。

市岡（弟） 兄の影響を受け、学生運動に参加。

角川源義 角川書店初代社長。国学院で折口信夫に学んだ新進国文学徒であったが、敗戦直後の荒廃に際し、日本文化を守りぬく決意をもって二十八歳

で角川書店を創業。学者、俳人として柳田国男、西行法師に深く傾倒。

辻 政信 旧日本陸軍大佐で本草学に精通。戦後、東南アジアへ長く潜伏。昭和二十三年帰国のち国会議員となり、首相の命により再び東南アジアへ潜行し謎の人物ドルジェフと対面する。

セルゲイ・ドルジェフ 中東、東南アジアを中心に民族解放闘争に暗躍する希代の超能力者。全学連に協力するため来日し、加藤、目方恵子らと壮絶な戦いをくり広げる。年齢不詳。

フサコ・イトー 元全学連の闘士。ドルジェフの側近として仕えている。昔の仲間の呼びかけでドルジェフと共に来日。

森田必勝 三島由紀夫率いる祖国防衛隊の学生長。

清川高鷹 三島由紀夫率いる祖国防衛隊の学生副

長

野村武士

吉村正彦

同 同

序 鴉の眼球

暗い水銀のどろりとした灰鉛色をたたえた鏡に、男の顔が浮かんでいた。匆ねられて飛んだ生首のような土気色をして――。

青い剃りあとが男の顔をいっそう蒼ざめさせ、太い眉の下の一重の目に鬼火を点していた。

バラック店が雑然と並んだ新宿三丁目界隈のざわめきが、酒場の戸口をすり抜けて男の耳もとにまで届いた。けれども彼は眉ひとつ動かさず、カウンター越しに暗い鏡の中の男を見つめつづけた。夕風にあおられて、建てつけの悪い扉がボタンとあいた。一瞬、外の騒めきが魔物の声みたいに見える。酒場へ転がりこんで――そして静まった。だが、小柄で華奢な男は身じろぎもせず鏡の中の自分に見入っていた。そばに置いたグラスへは手も伸ばさずに。

終戦後の新宿は、これまで帝都東京がめざしてきた町づくりのどの形式にも似ない姿で発展してきた。第一に、新宿の玄関ともいえる国鉄駅だ。新宿駅はもともと省線電車の正規な駅ではなく、引き込み線の終点だった。けれども、郊外を走る私鉄にとってこの駅は、いわば都心への門に当たっていた。

東京や上野や品川といった国鉄の中央駅から外され、地方への接点として存在する私鉄駅。そういう環境に花開いた新宿は、ショッピング街でもなく住宅地でもなく、かといって官庁街やビジネス街でもなかった。いつてみれば人の流れを飲みこんでは吐きだすポンプのような街。だから新宿は、人の流れからはみ出てくる者たちを一時匿まう淀みの役割に徹した。

しかしどういうわけか、戦後数年のうちに新宿のような形のへ中途の街——渋谷や池袋が栄えはじめた。同じ雑然とした界限でも、川向こうのドン詰まりとして栄えた浅草や両国とは、はっきり種類を異にする町が。

中途の町新宿に流れつき、暗い鏡のある酒場にほんのひととき安らうその男は、それでも決して心を弛緩させてはいなかった。

彼はさっきから鏡を覗き込み、まばたきもしない。むしろ緊張が首筋に宿っていた。

音の悪い蓄音器が、ジャズのうらさびた音色を奏でていた。さっき酒場の扉がぁいて、外の騒音がとびこんだとき、ついでに一人の女が店内に遁れてきた。女はしばらく暗がりを見つめまわし、やがてカウンターに坐っている男を見つけると、歩き寄っていった。

「平岡さん……」女にしては低い声だった。まるで喉を痛めているかのように。安い煙草でも喫みすぎるのだろう。着物に煙の匂いが染みていた。

平岡と呼ばれた男は後方を振り向き、女の顔を見上げた。薄いくちびるにいくらか朱味が戻ってきた。

「遅かったね」と、彼はつぶやいた。

「ごめん、客がいたの」女は横の止まり木に腰を降ろし、胸もとからピースの箱を取りだして一本を口にくわえた。

ジャズのメロディが変わった。ピアノの音がとても軽かった。女は煙草に火を点け、一服喫ったあと、ぼつりとつぶやいた。

「セロニアス・モンク？」

平岡は突然の話題に当惑したが、すぐに返事した。米国で人気の高いジャズピアノリストの名だと分かったからだ。

「ああ。ピアノがとてもいい。モダンジャズの神髄だね」

しかしそうは言ったものの、蓄音機から流れてくるピアノには雑音が入り混じり、まるで割れた皿のようにトゲトゲしく耳を襲った。

平岡公威は蒼ざめたくちびるを震わせ、隣にすわった和服姿の女を見つめた。上にはおった羽織が黒光りしている。

「三島先生……とお呼びしたほうがいいかしらね？」彼女は紅いくちびるを丸くすぼめ、突きだすようにして相手の出方を待った。

「三島などと呼ぶなくていい」男はふたたびくちびるを強ばらせた。

「あら。三島由紀夫先生が慥えた」女がフツと笑う。